

朝風意林五

和書門				
六〇冊	八架	七函	二七九七〇號	

内閣文庫			
三架	六〇冊	二七九七〇號	和書類

内閣文庫	
番號	和 27970
冊數	60 ( 5 )
函號	214 13

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



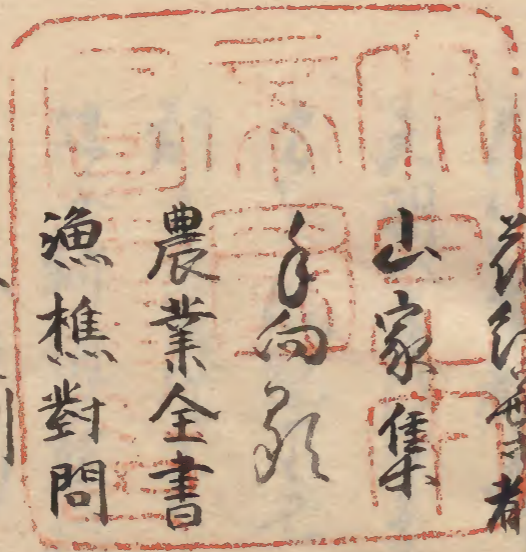
© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

解風書社

朝凡竟林五



花江集都新

山家集

子向

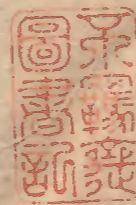
農業全書

漁樵對問

家道訓



明治十三年購求



京都府

東野橋間

景業全書

のり

のり

のり

○花紅葉都新

天明八年戊申五月廿九日夜亥の刻以より子七の  
方より風起り七の刻より〜〜〜河小野〜〜宣の下

刻より宣行より小野〜〜海日曉弁の上刻迄不図粟の  
辻より新道の懸れ角や〜〜記より兩替店仙米と〜〜い  
〜〜人家の隔壁の空より出火をとり〜〜暴風志記  
〜〜吹立〜〜い石垣町に糸下中社と南々文川町  
〜〜川端のら城五糸橋自〜〜と五六町針のらお後  
〜〜同小焼五糸の右橋中社を〜〜中筋本〜〜北の方凡廿五

斗焼為風辰この方より吹寄り寺町通仏光寺を  
不永寺の南の本堂一燃行津國より移り藪の下通  
以西にわけぬ寺仏光寺へ移り因幡兼原菅原の社  
又北の方六角堂より中へ入るに此あり  
徳不焼唐より移る所よりくるふ千本通土生寺の  
御まじ焼ぬけ南の方の本國より移り辰この方へ  
五重土塔より火うつる昔寺よりひる東六条の方へ  
風より吹寄り不燃寺より吹寄りて七条より東へ  
朝寺乃南院より焼唐よりくるて申京下東のり

五烟我巻きくお後我顧るるりありては東を以  
寺いふくくは防ぎ止まらばは後西の方へ焼来  
くおせきゆを焼く焼来と西を越る人門扉被焼  
の焼来一と外並の焼興寺門跡諸堂再  
建ありて雲鏡北を身く立りては不危り  
風と千の方より吹寄りて人取とまきり小塔より  
以の大口三の節より雨の火燃が火をけては流く熾  
んに上京より焼中へ東の方へ焼く七条より火  
吹寄り北の方へ珠教所所松穀竹殿の七条我七条

米市場の火より下寺町より本居町川東町の火は  
川東の火より焼上河津色より川東の火より  
より新町よりより川の火は川東の火より  
川東の火より二條堀川の火は焼上河津の火より  
堀川よりより土生寺ありと十年色は川東の火の  
方へ焼の火より川東の火より川東の火より  
多の火は川東の火より川東の火より川東の火より  
是より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より

又風成まの方より吹起く禁庭の竹方ありし  
より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より  
川東の火より川東の火より川東の火より川東の火より

の七の糸車終ちいし初ハハ焼くより多成心く  
風箱空くふれゆを去る一ハのやくられつた  
焼ゆりしとふふとふく焼ゆり吹れく部の  
比久河さひほほとらふふ山一始後成えは  
人の物緒一帯の古ゆり車終ち古の風に押きて  
比と之を烟の目よりつくそとよとつる内忍ち  
三三てもあふふふらりくとも風ぬふみと一  
記れくどつと火のふらり一とそそ初の高の別は  
よりを風とが一ふみく一百万火のふらりのあり

常ハ出火のともく一とやけ小怪一のり一  
上京の中り東南の方ハ麻きや糸の古のふらり吹  
麻き中糸の古の宇宙に多登そくともと鞠のと  
くふらり二抱もありぬんと一記火の玉風順  
と燃えは左左おはれ飛けりけ火のふらり不法を  
のりともつと一糸の所成と焼一とく忽ち一  
終ち一とや又晦日の夜より朝日の焼よむらと  
御津河内八和和泉丹波丹後近江若狭都く十  
四千里乃るら古光懸後成染かともく雲小映一月夜

のこく焼の光成りしに、夜は成りしに、いぬの  
白きに、大光雲、烟たらし、して、路程二十里の外まで  
夜は、こく、えん、こく、や、夜、よ、ふ、ほ、の、風、お、け、れ、し、  
く、大、光、雲、織、り、し、望、見、ふ、お、く、雨、あ、り、  
と、こ、向、く、電、光、跡、一、跡、成、り、し、こ、く、思、い、  
い、ん、方、向、り、し、一、押、し、度、の、大、光、雲、り、り、可、成、り、  
一、か、一、と、ふ、宝、永、五、子、の、大、い、今、も、後、つ、て、こ、く、思、  
一、記、の、な、れ、と、東、の、所、十、六、合、り、り、と、く、お、び、し、應、  
永、の、乳、ま、の、大、も、大、記、よ、と、こ、向、く、一、記、一、と、れ、と、す、

手契  
宝永五年  
戊子  
京師大

い、度、の、大、光、雲、り、り、及、り、鴨、の、生、的、り、方、丈、記、よ、記、せ、  
大、風、大、光、地、震、記、種、々、つ、れ、く、書、と、れ、り、身、の、  
も、と、く、り、り、ふ、な、れ、と、大、は、町、を、か、り、く、と、れ、  
京、の、内、こ、一、合、の、焼、り、り、い、度、の、大、光、雲、中、外、九、合、  
五、層、の、焼、り、り、諸、所、焼、失、れ、時、刻、を、り、り、と、り、り、  
と、り、と、れ、と、大、光、雲、り、り、と、れ、と、あ、ら、か、ら、小、町、刻、を、  
と、り、り、り、り、と、と、り、り、り、り、と、

一 正月晦日の曉、卯上刻、洛東園、象の過子、り、大、石、垣、町、  
川、端、四、条、下、二、町、目、り、り、と、系、橋、包、り、り、と、町、り、り、り、り、

忽焼度ある風の東部の方より吹く

一日申刻風尾の方より吹きし所永長ととひ火後  
是洛中(焼)一始めり

一日下刻穀の下よりとぬ焼佛光と山門跡(大福)等  
通り(里)系まてのる焼度あり

一日辰の上刻因幡軍師菅原の社等焼る

一日中刻六角堂及ひいし諸不焼度あり

一日下刻堀川より(土)生みけり焼ぬける

一日己上刻三条せり焼度あり下中(い)系西の申刻

吉倉馬丸の東西と南の方風上(焼)や

は右後(寺)に焼るの  
おとせ系め(い)ひ  
松穀は左に降(り)りし所及(は)新(寺)の方(と)東(寺)に(出)る系(を)河(を)町  
川系(所)は(長)所(に)置(け)られ方(を)た(り)し(と)焼(ま)り(り)

一日申刻下刻のる中系(い)て三条(い)れ(西)徳(所)に焼度あり

一日午(上)刻(本)木(新)寺(の)か(色)門(お)焼(る)下(北)殊(取)や(町)焼  
のり(り)松(穀)は(左)に(降)く(る)より(大)寺(に)焼(ぬ)く(る)

一日申刻(系)系(色)柳(の)ら(揚)る(系)東(北)方(は)新(寺)に(大)焼(ゆ)

一日(下)刻(系)系(白)の(所)に(方)徳(不)焼(度)あり(れ)り(河)永(長)に  
も(大)寺(を)焼(ぬ)く(る)也(福)あり

一日(未)の上(刻)も(河)を(河)系(下)北(焼)の(り)新(寺)に(北)境内



南の方から中より焼去る所いさゝか度いなり焼去る  
焚き終るも雲より北のこぼ

一口中列の北の方を方及いさゝか度いなり焼去る

一口中列は臨河市を所川京所を四系より北の方を焼去る

西の方よりいさゝか度いなり焼去る(大福を日くし包りや町の北

より焼去る)二系れ西地中より五所の小家八九軒焼去せぬ

いづれも系人の焼去る

一口申の上列より出る南風をけりて法衣は火燄まをり

とあがり木園より北の方より大福より焼去る南(焼去る)

二

西本殿より敷橋(火うけ)る二門焼去るは火風上とさう  
て候へ東南(焼去る)

一口中列上京新町より十の五と限り西陸と北(焼

去る) 中一十の五

一口中列は水色をのりはぬ七の板をそ九うち焼去る北の方の

は紫煙今よは旅まを焼去るは西風漸止む方より

火燄よりさうりては西陸進くつまやまてはしの物言ふは

たりあいのまをり焚庭は西方より焼去るまうんとくまの

是と九系はこれ七歩より焼去るや

一日言方面の上河西山の方より煙と流せる。こゝに雲が乾  
のちより大風になり吹起り、あまきうらな降大降、人き小樹人よ  
東南の方へ吹きたり、河所北の方包ら先しいの公の公  
河を遠あり、風を殊ふ烈し

一日夜河の河川集北の北の方道正菴のまじり、公御方大、  
道行く者酒を飲れり、こゝに酒を飲り、こゝに酒を飲り、こゝに酒を飲り、

一日河を河へ出、後、二町斗、河を河へ出、後、二町斗、

一日河の河へ出、御方、河の河へ出、御方、

焼出、焼出、  
と志のきり、と志のきり、  
漏れど、漏れど、  
と皆、と皆、  
一日子の上、一日子の上、  
一日中、一日中、  
裏、裏、  
堂、堂、  
一、一、

一日七の上列上系と所北のりりり本を町の南と南(わき下  
御具の社一系草堂をくく大移り

一日中列上系と所北焼るは的のむむむ

一日中列上系より諸所焼めり本を何と系下何松年と依る

も系下より焼止る是活中北焼とすりたり

一日曉寅の上列活系復ゆる新地へ飛ち一系新地の方

町家も焼るる

一日中列下列より大活中活より元満一りより大のみ

立昇るは方たり

一二月節日印の上列活系一西より焼崩れて下大とあるは列

より風をカーの静まりたり

一日辰己の列より大頂寺及びこれ新地一系新地の町に

悉く焼る一系北の方院の跡より焼止る南の方い壇王

法橋と此世何より北の方町ありて焼とすり

一日午の列活中活より大活系一りて活系大のみりりり

竹飯地をく焼出り一系町一こ又出大と

一日三日冒の活も大れりりりり活系も焼出と

一日五日六日小より一係縮ゆく焼とせぬ

九南の七条通

但一七条西より焼かす  
七条小代書所と

北は北地鞍子の口

卯子へ西の十本通

但一二条より小の方面へおが包  
まて焼ぬけとて手か包の裏所限りとりま

東は加茂川のふゆまへ 只晴くとも 眼れかきるふゆ

幸の焼ぬけをいふ

但一七条  
北の方面へ

卯子らの本堂法堂裏門

但一七条西の方面  
より焼ぬけとて

上河霊社西陣本隆寺門降福寺

西中敷

但一西門一ヶ所  
系不敷焼かす

東六条松鼓清友けり寺社

境内の留守或いは花門をいふ所なりともあり或は裏

側焼くまへなり又いふ所は焼く裏をいふ所なりともあり

くありともあり 只焼ぬけをいふ所なりともあり

大宮へまゝ北地銀をいふは白米三合六分沖合代所百文

五徳百文といふは五徳百文といふは五徳百文

焼ぬけ二十文といふは焼ぬけ二十文といふは

焼ぬけ二十文といふは焼ぬけ二十文といふは

つらかりま

これの所を通りまゝ徳子の公御方のほかりとてや

おの心いとまかりとてまゝなり

卯子焼たす由縁をみる

廿七席

と卯子焼たす由縁をみる 系と成よりなりともあり

玉ふき、れを

焼路をそくく

自年

実小と系焼路の跡をけつ

只後小とある

澄月

えのをもおとく吹返せ春れは是れふか

らるくは世哉

只後七系られ是れそく

公義

こいきまふれ浮世とと自雲れ是れそく

ひとつと春から

或は辨  
民の文母  
此れ所  
余と多  
信とい  
り未七  
れと

京火記事

同

東門災厄及池鱗

宮闕化煙花作塵

應是皇天改舊政

降斯凶虐革斯民

○山家集

待賢門院の中納言の房世をむまきて取

山のふもとよ住のりききとく取とく言中

舎とよあまのとり山よを雨れりるを所院の

艸の房部卯の栖とひやさそといとてふ

わりさうらありさうらんとさよ粉川へ

あつたるよはていつてあひくさる我女世に  
ありたれとらうて粉門西わうさるもの  
はひていあひある師ふと向を吹とみんと  
りあつてたれさるんてりあひ吹と  
かりり道より入る風ふきてけりあつて  
くさうとさうて吹とまわつてさうたれ  
見おるまはらうそ社よりうきさるんてりあ  
つてさうりり徳園のうりり水はせきさせま  
てりあつてたれさる物もは社よりまわつて  
さ

あつたるよはていつてあひくさる我女世に  
ありたれとらうて粉門西わうさるもの  
はひていあひある師ふと向を吹とみんと  
りあつてたれさるんてりあひ吹と  
かりり道より入る風ふきてけりあつて  
くさうとさうて吹とまわつてさうたれ  
見おるまはらうそ社よりうきさるんてりあ  
つてさうりり徳園のうりり水はせきさせま  
てりあつてたれさる物もは社よりまわつて  
さ

世中いふゆへにこそくうめりおもひ哉し

家成かへきむえうれ病よんをむかひりそ

近衛院の由基よんよくして事なり

あふりうたれん

えりりこの酒成あふりけりうつてみえは

こぬきよまうてけしやあは院なり

いしは徳島たれしうもあふりれん

松平の徳よあらうしあはれしあはりるる

松平の徳のりしうにうしとくあはれり

あふりあはれりあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれりあはれり

あはれり

○ふりあはれ

橋本院

あはれりあはれりあはれりあはれり

あはれり  
あはれり  
あはれり  
あはれり  
あはれり

邦のこゝろをさうするをさうするよりの後に出る  
○ 後ひぬまきいれはつねにありてはあつてはと申す  
り世にあらざるをさうするよりの先をさうする  
はさうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
ついでに書かれたる事一いつてはさうするよりの先  
右の事ありてはさうするよりの先をさうするよりの  
の事ありてはさうするよりの先をさうするよりの  
まゝにさうするよりの先をさうするよりの先をさう  
らさうするよりの先をさうするよりの先をさうする

○ 稲の種はさうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
さうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
うつろひてはさうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
後をさうするよりの先をさうするよりの先をさうする

○ 農業全書

稲の種はさうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
さうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
かうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
考へてはさうするよりの先をさうするよりの先をさうする  
稲の種はさうするよりの先をさうするよりの先をさうする



二十日中田晩田の四五十日少く刈志をよめる物なり

苗をよむふれぬのふれぬの田は二万と中らとよめるなり  
是よりよむ新多しよれぬ肥る田よよれぬやせ田よよれぬ  
よよ多かれゆふき種はうふと種播りうふ又よ種一れ  
よよれうふ種よよもゆ人のゆれよかき種行ある  
一とよれぬ種播りうふすふの法とよるをもよれなり

苗代は隣の茶とよむる苗はくせ種よとよくまをよれ  
りん一斗前よよきよれぬと種よ入うよよ竹地よよ種  
の一一よよもきく苗代よよ種よとよやうなり

苗代地なる正月も耕したるを修くニニ種も種よ新  
かきとよむ一畝は竹種子二斗五斗前と中らとよ種一  
はよと入るゆ一斗前よ竹十把とよるをよとよに五把づ  
ゆふも種地なる一斗前地のよ種よとよの或よよ  
ふもあつとよとよ一畝にの室よがたと地の肥硫よとよ  
苗代よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
苗床とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
き苗代とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

高き上境の軍として其上の性れ強き誠好きも弱く所

三比のなるまにありてす

宇治龍崎海尾を以て羽の二つを、何とて收録き亦此  
石地ありてれん茶種よりあるごとく、小陰かど日南れ  
ありき風をまげし此和茶ありりとてんえんりり系  
定をを任る人いれ考へをちりてし、尾城都市中  
田家山中をもれがも園地となるおあり、必多おあり  
可茶を移ぐ一なるして、あるに茶より後と書たり  
あるるよりり一なるうへ出せ、数年後てくも、枯れら

物小ありてするもの、人の意きなり、貪るに射を助るより

、上流秘法して、通茶の用ひく、きと名は草麻子草麻子

と後さしきりて、いれこむ、却つて、是のうへ、一寸

四方を、ぬれたりと、色ざる、ぬ茶なり、身して、ほを和

くほひを、て

○漁樵對問

宋 邵雍

漁者謂樵者曰天下將治則人必尚行也天下將亂則  
人必尚言也尚行則篤實之風行焉尚言則詭譎之風  
行焉天下將治則人必尚義也天下將亂則人必尚利

也尚義則謙讓之風行焉尚利則攘奪之風行焉三王  
尚行者也五霸尚言者也尚行者必入于義也尚言者  
必入于利也義利之相去一何如是之遠邪是知言之  
于口不若行之於身行之於身不若盡之於心言之于  
口人得而聞之行之於身人得而見之盡之於心神得  
而知之人之聰明猶不可欺況神之聰明乎是知無愧  
于口不若無愧於身無愧於身不若無愧於心無口過  
易無身過難無身過易無心過難既無心過何難之有  
吁安得無心過之人與之語心哉

漁者謂樵者曰子知觀天地萬物之道乎樵者曰未也  
願聞其方漁者曰夫所以謂之觀物者非以目觀之也  
非觀之以目而觀之以心也非觀之以心而觀之以理  
也天下之物莫不有理焉莫不有性焉莫不有命焉所  
以謂之理者窮之而後可知也所以謂之性者盡之而  
後可知也所以謂之命者至之而後可知也此三知者  
天下之真知也雖聖人無以過之也而過之者非所以  
謂之聖人也夫鑑之所以能爲明者謂其能不隱萬物  
之形也雖然鑑之能不隱萬物之形未若水之能一萬

物之形也雖然水之能一萬物之形又未若聖人之能  
一萬物之情也聖人之所以能一萬物之情者謂其聖  
人之能反觀也所以謂之反觀者不以我觀物也不以  
我觀物者以物觀物之謂也既能以物觀物又安有我  
於其間哉是知我亦人也人亦我也我與人皆物也此  
所以能用天下之目爲己之目其目無所不觀矣用天  
下之耳爲己之耳其耳無所不聽矣用天下之口爲己  
之口其口無所不言矣用天下之心爲己之心其心無  
所不謀矣夫天下之觀其于見也不亦廣乎天下之聽

其于聞也不亦遠乎天下之言其于論也不亦高乎天  
下之謀其于樂也不亦大乎夫其見至廣其聞至遠其  
論至高其樂至大能爲至廣至遠至高至大之事而中  
無一爲焉豈不謂至神至聖者乎非唯吾謂之至神至  
聖者乎而天下謂之至神至聖者乎非唯一時之天下  
謂之至神至聖者乎而千萬世之天下謂之至神至聖  
者乎過此以往未之或知也已

樵者曰人有禱鬼神而求福者福可禱而求耶求之而  
可得耶敢問其所以曰語善惡者人也禍福者天也天

道福善而禍淫鬼神其能違天平自作之咎固難逃也  
天降之災穰之災益脩德積善君子常分安有餘事於  
其間哉樵者曰有爲善而遇禍有爲惡而獲福者何也  
漁者曰有幸與不幸也幸不幸命也當不當分也一命  
一分人其逃乎曰何謂分何謂命曰小人之遇禍非分  
也有命也當禍分也非命也君子之遇福非分也有命  
也當福分也非命也

樵者問漁者曰小人可絕乎曰不可君子稟陽正氣而  
生小人稟陰邪氣而生無陰則陽不成無小人則君子

亦不成唯以盛衰乎其間也陽六分則陰四分陰六分  
則陽四分陰陽相半則各五分矣由是知君子小人四  
時有盛衰也治世則君子六分君子六分則小人四分  
固不勝君子矣亂世則反是君君臣臣父父子子兄兄  
弟弟夫夫婦婦謂各安其分也君不君臣不臣父不父  
子不子兄不兄弟不弟夫不夫婦不婦謂各失其分也  
此則由世治世亂使之然也君子常行勝言小人常言  
勝行故世治則篤實之士多世亂則緣飾之士衆篤實  
鮮不成事緣飾鮮不敗事成多國興敗多國亡家亦由

是而興亡也夫興家與興國之人與亡國亡家之人相  
去一何遠哉  
樵者謂漁者曰國家之興亡與夫才之邪正則固得聞  
命矣然則何不擇其人而用之漁者曰擇臣者君也擇  
君者臣也賢愚各從其類而為奈何有堯舜之君必有  
堯舜之臣有桀紂之君而必有桀紂之臣堯舜之臣生  
於桀紂之世猶桀紂之臣生於堯舜之世必非其所用  
也雖欲為禍為福其能行乎夫上之所好下必好之其  
若影響豈待驅率而然耶上好義則下必好義而不義

者遠矣上好利則下必好利而不利者遠矣好利者衆  
則天下日削矣好義者衆則天下日盛矣日盛則昌日  
削則亡盛之與削昌之與亡豈其遠乎在上之所好耳  
夫治世何嘗無小人亂世何嘗無君子不用則善惡何  
由而行也樵者曰善人常寡而不善人常衆治世常少  
而亂世常多何以知其然耶曰觀之於物何物不然譬  
諸五穀耘之而不  
夫蓬蓬不耘而猶生耘之而  
求其盡也亦未如之何矣由是知君子小人之道有自  
來矣君子見善則喜之見不善則遠之小人見善則疾

之見不善則喜之善惡各從其類也君子見善則就之  
見不善則違之小人見善則違之見不善則就之君子  
見義則遷見利則止小人見義則止見利則遷遷義則  
利人遷利則害人利人與害人相去一何遠耶家與國  
一也其興也君子常多而小人常鮮其亡也小人常多  
而君子常鮮君子多而去之者小人也小人多而去之  
者君子也君子好生小人好殺好生則世治好殺則世  
亂君子好義小人好利治世則好義亂世則好利其理  
一也

○家道訓

貝原篤信編

子成之つる小いおらうと何ひまゝあるとや  
くやうじつ衣服忌月ひ下等の作衣わつた  
の材福ううくうくうくうくうくうくうく  
成らうくうくうくうくうくうくうくうく  
ふゆらうと教ゆわつたうけなす所ううく  
年をうくゆきくきくきくきくきくきく  
おろくうくあうくあうくあうくあうく  
のあうくうくうくうくうくうくうく  
何うに

て誠をいふと身よまのいの子 質朴よ人し又おと  
うわまうあてをいふしめてうさうゆつる  
ふとさし一ゆ一子誠をいふゆまにゆさうゆと  
たたの心をあふふふあふといふの賈誼の文  
ふちうゆさし一心をあふふ一ゆさう 糸さふ  
あふうううやさし一ゆさういふ人あふいさうあふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
しきゆさういふゆさういふゆさういふゆさう  
あふゆさういふゆさういふゆさういふゆさう

後よあふゆさういふゆさういふゆさういふ

凡そをいふゆさういふゆさういふゆさういふ  
をあつくとさし一ゆさういふゆさういふゆさう  
夫婦ゆさういふゆさういふゆさういふゆさう  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ  
ゆさういふゆさういふゆさういふゆさういふ



今銀葉所なりとも武徳のよ別又たくりは  
一ある常の町町用をきくして急用ありと  
も武徳のよあふくりきりきりて用あり  
は元武徳の化のきりきりきりきりきり  
に軍を町をきりきりきりきりきり  
町をきりきりきりきりきりきり  
よ臨用をきりきりきりきりきり  
くりきりきりきりきりきりきり  
りきりきりきりきりきりきり

あやのいとはかきりきりきりきり  
来りきりきりきりきりきりきり  
一えぬぬいりきりきりきりきり  
りきりきりきりきりきりきり  
一きりきりきりきりきりきり  
しりきりきりきりきりきりきり  
きりきりきりきりきりきりきり  
一きりきりきりきりきりきり  
きりきりきりきりきりきりきり

いふゆゑに人々をふじし一古也るるが如き  
りらりやと一古州あるはつしししし  
家のつとめありてい三族をふしししし三族  
ソヤ一又族や二又母族や三又妻族なり又  
方の一族いふ族と云先祀より傳へぬ血脈  
印一親族のりりあれとわきまを回きならぬ  
つあつくまししし一又族とあれくまはししし  
是又先祀つししし及なり次り一母方の一族  
いそ又族つししししししし一又妻の一

族の母の族よつまう三族をふしししし  
中祀をくれや一是右の法也今人いふ妻族  
をとりしはししし一又族母族よりししし  
をとりしはししし一又母への不孝なり  
ゆゑの句いと云し一妻族をふしししし  
と云よいありとを指すの次ありししし  
わの身躬夕飯食の侍をいりししし身と  
労働よりしししししししししししし  
とらて身と忠實しししししししししし

らぬくみかくとれんや一徳と昔の次小牙  
と中らひぬよむを中らふ三の是れを徳  
合流流中ん身と労働をれを食を清  
らふ身血あふ脾胃やれとくまを  
ふよりり一又身と労働をれを報新業若よ  
とつくと孝の如き同業術を若よつ  
とよりり一又身と労働をれと安を  
あふく報新業を徳一と孝のつとよ  
とくく一と孝同業術を若よつとん

士々民勇のくれにや軍陣おく報  
若よと人の病をり身よりり是月より  
以武勇とくれにや一は少を心を安静  
か身と労働をれ一  
五徳とくれにや若よと報新業を徳一  
よつとくれにや徳若よと若よと若よと  
とつとくれにや若よと若よと若よと若よと  
めかむわはひあし勤徳の三孝つ徳りちり  
若よと若よと若よと若よと若よと若よと

一勤者の人の道也三人の勤者といふは勤者の  
地の所也地いふは人といふは勤者の勤者の  
一勤者の地いふは勤者の勤者の勤者の勤者の  
の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者と少人の言奴婢の勤言<sup>チカコト</sup>る勤者の  
らに父子兄弟父母の勤者の勤者の勤者の  
勤者の人の勤者と勤者の勤者の勤者の勤者の  
物人と少人の勤者と勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者一勤者といふは勤者といふは勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の

一和漢古今下りれり勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者也凡勤者いふは勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者は勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者一勤者といふは勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の

勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の  
勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の勤者の

しつら者乃ううていありえなりうう人の  
らふ家より一物一いつい口何ん人  
しつら者乃う迷うていけいし一品  
者いしつら

毒を取らふいしつら人のと良家此如  
と或るしつら良家といはれし中つら  
しつら風俗をさうたさういふよりい  
しつら家のしつらありしつら人のいしつら  
しつら母よりいしつらありしつら人のいしつら

も毒はも多し母も多しなり一あり毒者の  
女子のうり子に毒あり

今も針ありしつらありしつら針ありしつら  
つらありしつらありしつらありしつら  
毒のいしつら父母の毒にしつらありしつら  
父母のいしつらありしつらありしつら二十  
毒ありしつらありしつらありしつらありしつら  
毒ありしつらありしつらありしつらありしつら  
針ありしつらありしつらありしつらありしつら

とてこれよりおとなの針とあつて一とて家針  
と云ふ事にしていふ所のとありたり子孫の事  
かく世のいふ所をいふ事ありていふ針とあつ  
ていふ事と針と云ふ事ありていふ所の死後の事  
といふ事ありていふ死後の事ありていふ事  
とて死よの事ありていふ事ありていふ事あり  
針の事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
とていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ

事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
うらむ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
ていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
物ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ  
事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ



りて君よつらんといふ海に人又のあよあ  
りて孝行のひらあき人友職とあらる人  
藝術の事業ありといふは人の心を清  
く一事をさしあさるる一てさうさう  
職をさしあさるる一事をさしあさるる  
心のさしあさるる一事をさしあさるる  
一てさうさう一てさうさう一てさうさう  
一てさうさう一てさうさう一てさうさう  
人よ君よつらんといふ海に人又のあよあ

を又生かすらんといふ海に人又のあよあ  
なと成らばらんといふ海に人又のあよあ  
物のいのちをさしあさるる一てさうさう  
一てさうさう一てさうさう一てさうさう  
常小居るをいふ海に人又のあよあ  
首の光りくふらんといふ海に人又のあよあ  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
在中もつて掃除しつてあつてあつてあつて  
くみかたれん言成昔の心をさしあさるる



くわくりりりれつなきはつとからともなる  
まぐくひまの元なきふくまぬくつたれ  
後部さやらの居るまわつてつとこのよの徳とす  
し

りらうよたまの徳より事経寛く福自  
厚より事実ふせつとつとつとつとつと  
らつとつとつとつとつとつとつとつと  
まの福ありまのつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと

ゆらやふわつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと

元右平の世の徳の年つとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつと

をうくおのんいりて一美のふいを記後めりて  
おくおのんはうくおのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて

おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて

おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて  
おのんを記後めりて

老をこころひく昔哉知らふをこころひく  
一は是人の心もよをじつらせぬのこころ  
命の富もららひあはれらるるおちるこ  
初を多くおらしてつゝ身はつれづれ  
おちるこころひくこころひくこころひく  
物ちり石をこころひくこころひく  
とちり海濱とちりのこころひく  
おちるこころひくこころひく  
初と月を道と云ふてをたねらるる又母とや

一はこころひくこころひくこころひく  
人をこころひくこころひくこころひく  
廓の道のこころひくこころひく  
しつひをこころひくこころひく  
おちるこころひくこころひく  
しつひをこころひくこころひく  
らる困窮の候初をこころひく  
おちるこころひくこころひく  
おちるこころひくこころひく





訂を用ひふはあるとあるはよふは訂の本  
ひやうふひきい集もとむよはる訂やう  
ありれいとあるとあるはよふ訂を用ひ  
おをを用ひて  
備の一字の家と破るの基也い一字成るは禁  
とて訂條の多かふ成少ふは訂の  
を訂の用ひて不足なるは訂を用ひ  
也一とあるとあるはよふ訂の  
を訂の用ひて不足なるは訂を用ひ

人の借る訂を借れは年々に利息を  
しと訂のよふ利加うはよふとて  
おひあひてはありて家をせむ借  
りて利り或人はあふれは後をわ訂の  
訂の用ひては訂のよふ利加うはよふとて  
向うとむては訂のよふ利加うはよふとて  
訂の用ひては訂のよふ利加うはよふとて  
年をらとては訂のよふ利加うはよふとて  
中なるはよふ利加うはよふとて

外のゆきさらきくしひれけさいよとあ  
らしてうらぬ一ぬい紅とあてあてあ  
たもの道は信年と禁をく一少のま  
多くうらふいり多くれいあとなり  
う一信のうとあてあてあてあ  
あを破る紅とあてあてあてあ  
いよとあてあてあてあてあ  
うき印とい我方と妻子れ信書とあ  
して報難とあてあてあてあてあ

信書とあてあてあてあてあ  
いよとあてあてあてあてあ  
く一報難とあてあてあてあ  
とあてあてあてあてあてあ  
よらひく一い  
を信書の時報書を信書とあてあてあ  
一世の人多くいあてあてあ  
道とあてあてあてあてあてあ  
後日のわいりいあてあてあてあ

まゝに初より初を多めく用ゆらゆり初  
すべし<sup>たの人</sup>初を儉約し一美不自由とす  
あ初をみくらにつゝあさひ人の初をのり  
ささくひくふらふ能はずとせぬよ初を  
る人まきせしや初をのりして人よれ  
んはらそいそくしてあはさす今め  
んを人の初をあらもこの人よりの初を  
まらひく初を倍する多きをふめいり  
とす初をうるまてんはらふ初を人を受歎

なりいさ初よきとて用せ又儉約し  
みくらよりの初をくらをくらを  
くらく文書くらとてくら初をくら  
のよき初をくらあひく初をか  
くら人のふいあひくらくらくらくら  
あひく初をくらくら道に初くら  
初と各番よりの初をくらくらくら  
くらくらくらくらくらくらくらくら  
親戚朋友よきくらくらくらくらくら



初よりあつたをいふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは  
いふはかたしとていふはかたしとていふは

久々

儉約人の貞酒をいふはかたしとていふは  
聖賢明王皆儉約をいふはかたしとていふは  
の儉約をいふはかたしとていふは  
らひく鄙者たりとていふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは  
若くはさういふはかたしとていふは

なりいじりならしむる一 一人とて新に  
俟物を文口番とせり  
後の事をも通ずるに 面所方のやり  
おぼしき酒會をゆつりし 書指さるる  
衣服ささり物をゆつりし 貴人さ  
しんけんさるるおまじりより事さるる  
灯さるる人さるる書さるるおまじり  
さとのしは眼おとせりて 後の事さる  
りし物さるる人さるる 灯さるる人

よ侍り来り仰とちりし 侍さるる灯さるる  
利りさるるゆきさるる 灯さるる  
物をつきのきさるる 御さるる  
初よりこのはのさるる 御さるる  
灯さるる  
ゆきさるる御さるる 人さるる  
さるる御さるる 御さるる  
おぼしき書指さるる 御さるる  
おぼしき御さるる 御さるる  
おぼしき御さるる 御さるる  
おぼしき御さるる 御さるる

しやうらふれいふくも成はらけ  
夫らと

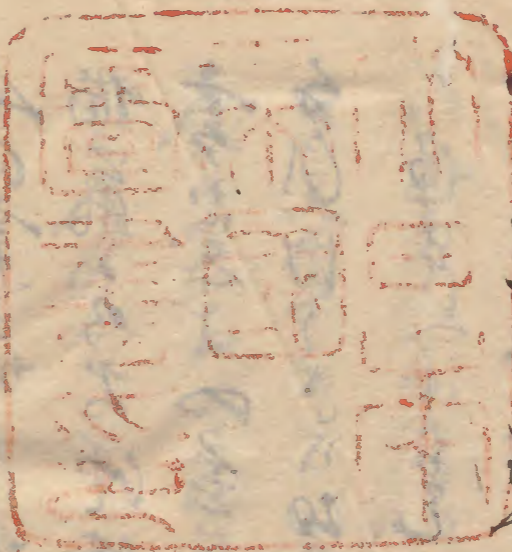
お母は男子多くいへるよく産業と立  
分計とらひく一節おは女子をいひあへん  
つひく家々の装束をそのあつら  
ひとらふく一女子をわしねと名根  
うらむとととらひひとねと家と物と  
やしたかしとと桐を多くうけて女子の装  
束とら若今とありぬめゆととと子

く針とてふとてつとけらる様とあそく  
一節酒とくくくくく用とあられは女子の  
嫁とら所とのうけてふとたとつととつと  
取つらふく一  
を人におく信とらうらく舞をさうれく  
富子のあしと何ふふんて俄と細とまじ地  
ありとふとあつとあつとあつとあつとあつと  
とと物と活印と細釘ととととととととと  
とととととととととととととととととと

〜〜〜の〜〜〜よ〜〜〜を〜〜〜て〜〜〜  
人よ〜〜〜物〜〜〜心〜〜〜を〜〜〜し〜〜〜  
あ〜〜〜物〜〜〜を〜〜〜る〜〜〜  
〜〜〜魚〜〜〜肉の〜〜〜き〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜味〜〜〜  
〜〜〜果〜〜〜とい〜〜〜  
〜〜〜書〜〜〜ある〜〜〜物〜〜〜  
〜〜〜人〜〜〜の〜〜〜め〜〜〜ら〜〜〜  
〜〜〜ら〜〜〜ら〜〜〜ら〜〜〜ら〜〜〜

人の書とかい換汚さ〜〜の屋漏ぬ〜〜  
猫鼠の犬神贖小鬼の〜〜と〜〜  
書〜〜の〜〜意〜〜の〜〜を〜〜く〜〜る〜〜  
〜〜ひ〜〜け〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜  
〜〜と〜〜は〜〜人〜〜の〜〜書〜〜を〜〜

しつゝい富あるくし書とらんものよ  
も書紙のいれりま下ゆは我の書ふあり  
それの月ある時考へるく紅多き人の書を  
買ひてし



紙数四拾参枚

